月が綺麗な夜だから

玖鴎燎助

夜は嫌いだ。月が、僕を笑うから。

◆◆◆

家人に気付かれぬよう、ゆっくりと階段を降りていく。ギシギシと鳴く板張りの階段は慣れたものであるが、しんと静まった夜更けには、少々迷惑な雑音である。

廊下を軋ませながら玄関へ向かい、鍵を開けて外に出る。八月も終わりに差し掛かっているが、それでも気温の上では未だ夏。にもかかわらず、夜気に充ちたこの時間だけは、涼しい風が体を撫でる。

門の蝶番が擦れる音が、閑静な住宅街に響く。深夜のこの一帯は物音一つせず、申し訳程度にしか数のない街灯の明かりだけが、煌々と夜の帳を照らし出す。誰もが眠りに落ちているこの街の中で、今は僕だけが生きている。

午前二時半過ぎ。今日も今日とて、日課の散歩はやめられない。

まるで空が笑っているようだ、と暗い空に浮かぶ三日月を眺める。明るく光る月が、薄い雲に霞む。流れる雲に揺られる月は、まるで蜃気楼のようだ。

住宅街を抜け、街灯だけの街を歩く。不夜城とはいかないこの街は、深夜ともなれば活気は失せる。正常な時刻で生活する人々は、この時間には眠りについてしまうのだ。耳を劈く雑踏も、目に痛いほどのネオンも、この時間だけは無縁だ。

「こんな時間でも頑張ってるな、コンビニは」

暗く眠った街の中で、機械的に人々を受け容れるコンビニエンスストア。数えるほどの人が、隔離されたように起きている。

終電はとっくに終わって、人の行き交いは途絶えている。都心からは離れて、田舎よりは発展した中途半端なこの町は、異様なまでに静まり返っている。五月蠅いほどにざわめく鳥も、今は鳴りを潜めている。

熱の籠もった街の中を、少し急ぎ足で歩いていく。温く蒸される空気に、八月の名残を感じる。暦の上では秋だが、やはり気温は夏に留まっているらしい。流れ始めた汗に辟易しながら、いつものルートをなぞっていく。

そのまま死んだような街を通り過ぎ、自然公園へ入る。人工的な街の中の静けさは病的で嫌気が差すが、自然の中の静けさは、清涼剤のように心を洗ってくれる。だから、雨の降っていない日の散歩コースは、いつもこの公園だ。

生い茂った木々の間を縫うように、舗装されたジョギングコースを辿っていく。虫の声を聞き

ながら、風に擦れる葉音を感じる。吹き抜ける風は涼やかに、街に蒸された体をゆっくりと冷やしてくれる。

足は自然と緩慢になる。間延びしたような時間の中で、心は穏やかになっていく。ゆっくりと歩きながら、月明かりだけの夜の森に溶け込んでいく自分を感じる。

森の中を暫く歩くと、急に視界が開けた。円形に切り取られたその場所は、日中には家族連れが憩う広場となっている。子ども達が遊ぶ木で組まれた遊具であったり、父母が日を避けて休む屋根付きのベンチであったり、人々が集まるには実にお誂え向きだ。

そんな広場も、今は人の息づかいが絶え、まるで打ち棄てられた廃墟のようだ。日の光を浴びて蘇生するとしても、そこで楽しい気持ちに浸るには、少し歳を取りすぎている。

子ども達の笑い声が響くだろうその広場を通り過ぎ、公園の更に奥へと進んでいく。思い出がないわけではないが、振り返るのも億劫だ。

空を見上げれば、未だ笑う三日月が、夜の空に浮かんでいる。雲は風に押しやられ、その輪郭をはっきりと浮き上がらせる。その笑顔は微笑か、それとも嘲笑か。見上げていた視線を足下に戻し、フードを深く被り直して、少し足を急がせながら先に進んだ。

瞬間、風が強く吹き抜ける。木々を激しく揺らしながら、狭い小道を通り過ぎる。被り直したフードは風に煽られて、いとも簡単に脱がされた。

ふと、今まで見たことのない道を見た。

ジョギングコースから外れた、舗装されていない砂利道。木々の隙間は狭く、人一人がどうにか通れるほどしかない。が、地面は踏み固められているようで、道として機能していないわけではないらしい。

フードを被っていては見逃してしまう、そんな些細な隙間。道と呼べるかどうかさえ怪しいその隙間を、風に煽られて見てしまった。

木々のざわめきは蚊帳の外。月に照らされながら、道の真ん中で立ち往生。視線を惹き付けて止まないのは、いつものコースではなく、未開拓の細道だ。

ポケットから携帯を取り出し、時間を確認する。午前三時五分。家に帰るには少し早い。

携帯をポケットにしまって、風に脱がされたフードをもう一度被り直すと、足の向きを変えて、日頃の散歩コースをはずれることにした。

舗装されていない道というのは、慣れていない人間には歩きづらいもので、無論僕も例外ではない。何度も道の凹凸に足を取られながら、もたつく足で前へ進んでいく。

風が途絶えて久しい。足で踏みならす砂利の音だけが響く。慣れない道と蒸された空気に、汗がじっとりと滲み始める。夜空に浮かぶ三日月が、そんな僕を嘲笑うかのように照らし出す。

木々から漏れる青白い月光が、暗い森の中の唯一の道標だ。曲がりくねりながら奥へと誘う小道を、頼りない明かりだけを頼りに進んでいく。

どれぐらい歩いただろうか。距離としてはそれほど進んでいないが、体力と時間だけは費やされているに違いない。普段の運動不足がこんなところで祟るとは思いも寄らなかった。

もう少しだけ歩いて、何もなければ引き返そう。そう決断した矢先、小道は終わりを告げた。

――そこはまるで、御伽話のようだった。

小さく穿たれた穴のような、森の中の開けた場所。木々はまるで城壁のように険しく、縁取るように囲んでいる。弱々しかった月の光は、まるで太陽のように燦然と、それでいて星明かりのように優しく、その開けた場所を照らしている。

森に埋もれた自然の広場。光に照らされて輝くのは、月を映した水の鏡。小さな湖は、透き通るような青に、頭上の夜空を投影している。穏やかな風が吹き始め、水面を静かに揺らした。波打つ月が、踊るように水の上をたゆたう。

暗く眠った街の中、この場所だけは、夜であるからこそ輝いていた。

湖の周りを沿うように歩いてから、適当な場所に腰を下ろす。視界を遮るフードを脱いで、目の前の景色に見入る。

あれほど避けたかった月の明かりも、この場所では穏やかに受け容れられる。風は決して強く吹かず、この繊細な空気を壊さぬように、揺れるように通り過ぎる。

ここには人工物の入る余地はない。街の喧噪さえ他所に押しのける。聖域のように清浄で異常な、透き通った凪のような空気だけが充ちている。

何者も受け付けない完成されたこの場所に、ただ一つの異端として、ほんの少しだけ交わる。白いキャンバスに付けられた、黒い絵の具。今の自分は、きっとそんな存在だ。そうやってキャンバスを汚してでも、目に焼き付けたい情景がそこにあった。

息づかいは小さく。身動ぎ一つさえもどかしい。心臓の音さえも止めてしまいたい。視界の端に映る自分の姿が邪魔だ。

目も、耳も、鼻も、肌の感触までも、目の前の景色に集中させたい。目に映る水面の波一つ一つが、耳に響く木の葉の音が、鼻を擽る草の臭いが、肌を撫でる風の感触が、心地よく体を満たしていく。

そうしてどれほどの時間を過ごしただろうか。携帯の表示は午前四時三分だ。そろそろ帰ろうかと立ち上がったとき、小道の奥から気配が近づいてきた。軽やかな足音が、森の奥から響いてくる。

誰か、来るのだろうか。

これほど浮世離れした場所だ、他の誰かが来ないとも限らない。誰かと会うのは避けたいが、この場所に続く道は一本しかない。どうあっても邂逅は避けられなかった。

足音は段々と近づいてくる。慣れているらしい足取りは、どうやら砂利道を踏みならした張本人のようだ。つまり、この場所の常連ということになる。鉢合わせてしまうのは想定外だったが、今更遅いだろう。

戸惑いながらも動くことが出来ず、じっと森の出口を睨み続ける。そうして、風のように静かに、彼女はやってきた。

「……おや。こんな時間のこんな場所で、まさか人に会うとは思わなかった」

月の明かりの下に現れたのは、年の頃は二十歳手前ぐらいの若い女性だった。月明かりに映える黒いシルエット、そこから覗く、陶器のような白い肌。そのコントラストが、まるで影絵のようだ。

片手に提げたビニール袋の中には、ペットボトルの飲料が一本と、菓子パンのようなものが入っている。袋に印字されているのは、ここへ来る途中に見かけたコンビニのマークだ。

その女性はこちらを特に気にする訳でもなく、僕の前を通り過ぎると、盛り上がった木の根に腰掛けて、菓子パンを食べ始めた。

呆気にとられてそのまま怪訝な目を向けていると、それに気付いたのか、パンを食べる手を止めて、こちらに向き直った。
「ん？　私に何か用かい？」
単純な質問だったのだろうが、真っ直ぐな視線と態度に、思わず目をそらす。そもそも、ここ数ヶ月まともなコミュニケーションを取っていない自分にとって、向き合っての会話はあまりにも困難に過ぎた。
そんなこちらの意を知ってか知らずか、女性はもう一度視線を湖の方へ戻し、食事の続きを始める。女性にしては速いペースで、メロンパンが平らげられていく。
ちらちらとそちらを見ながら、決して視線が交わることのないようにフードを被ると、質問するために口を開くことにした。
「あ、あなたは、その……いつも、こ、この場所に、来てるのか？」
言葉遣いも滅茶苦茶で、時々詰まりながらも言葉にする。声も小さかったが、音も寝静まったこの場所では、思いの外響いたようだ。
「ああ。バイト終わりは、いつもここで朝焼けを眺めているんだ。夜の湖も綺麗だが、朝日に輝く湖も中々だよ」
よく澄んだ、鈴を振るような声が森に染みていく。自分がキャンバスの黒点ならば、彼女は絵画の中に溶け込む色彩だ。この場所で唯一爪弾きされるのは、どうやら自分だけのようだ。
「そういう君はどうなんだい？　数年通い続けているが、君を見かけるのは初めてだ。単純に時間が合わなかっただけかな？」
質問を返されるとは夢にも思わず、頭が混乱する。ただ事実を言えば済むものを、その言葉が出てこない。
言葉を喉に詰まらせてしまい、彼女を戸惑わせてはいないかと、彼女のほうを向く。しかしこちらの心配など杞憂に過ぎず、彼女は悠然と、その瞳に湖を映していた。
ただ湖を眺めているだけにも見えたが、僕は彼女が答えを待っているのだと、そう思えた。薄い笑みを浮かべながら、彼女は湖の向こうの夜空へと視線を投げている。だが、彼女の意識はこちらに向けられていた。
「……いや、ここに来るのは初めてだ。いつもの散歩道を、ちょっと外れたら見付けたんだよ」
詰まっていた声が、すんなりと口を通り抜けた。どうやら、そのことに驚いたのは他でもない自分だけのようだった。他人との会話で、こんなにも自然に声がでたのはいつぶりだろうか。
その答えを聞いた彼女は、こちらを向いて、柔らかく笑った。
「成る程、君はそんな風に話すんだな。気取るより、そちらのほうが自然でいいと思うよ」
答えよりも喋り方のほうが気に入ったらしい。それだけ言うと、彼女は再び湖に視線を戻した。
そんな超然とした彼女の姿を、湖に映る月と同じように、焼き付けるように見入っていた。
凪に溶け込む風のよう。吹けば消えてしまいそうな筈の彼女の存在感は、しかし大地に根を張る大樹のように、この湖に根ざしている。人でありながら、街よりも森が似合う。ここにいることが、何よりも当たり前のように、彼女は自然と構えている。
その姿は、憧れても届かない、飾らない在り方だ。
「……また、来ても良いかな。明日も、同じ時間に」
だからだろうか。そんな似合わない言葉を口にした。
「私に許可を取る必要はないよ。ここはただの公園だ、好きな時間に、好きなように来ると良い。

そのタイミングに私がいるかは分からないけれど」
今度はこちらを見やることなく、視線を湖に向けたまま答える彼女。それでも、僕はその答えに満足して、森の出口に足を向けた。午前四時十七分、空が白む前に、早々に家へ帰ることにした。
もう一度、名残を惜しむように振り向いた。静かに水面を眺める彼女は、一枚の絵のようだった。

◆◆◆

夜の世界には誰もいない。そして、夜にしか僕の居場所はない。

◆◆◆

深夜。草木も眠る丑三つ時。今日も今日とて、夜の散歩はやめられない。
住宅街も、商店街も、昼間までの喧騒が嘘のように静かになる。とはいっても、その昼間の喧騒とは無縁の僕にとって、音の絶えた深夜の街が知るところのすべてだが。
そんな夜でも、起きている人間は起きているものである。一番目に付くのはコンビニの中だ。眠りに就かない若者たちを受け入れてくれる、格好の集い場となっている。
以前、彼女にコンビニの意義について尋ねたことがある。なぜあれは二十四時間営業なのだろうか、と。わざわざ客の少ない深夜までやる必要はないだろうと思っていたのだが、彼女は不思議そうに傾げた後、さも当然のように答えた。
「あれは、二十四時間開いているのではなく、ただ単にいつまでも閉まらないだけだ。開閉の分別が、ああいった手合いの店にはないんだよ。明かりの文明が発達したことで、わざわざ夜を一区切りにする必要がなくなったから、尚更だろうね」
と、答えになっているのかなっていないのか分からない回答が返ってきたのを覚えている。
が、別に彼女はそれを否定することはない。まあ、日頃からその二十四時間営業のお世話になっているのだから当然ではあるが。
そうやって彼女との会話は、初めてあった日からずっと続いている。
数日が過ぎているが、僕は必ず夜になると、あの湖のある場所に行き、月を見ながら彼女と会話をしている。あれだけ話しやすい人間は今までいなかった。まるで数年来の友人のような、或いは家族のような話しやすさだ。
断っておくが、別段誰かと話すことに飢えているわけではない。一人で生きていけるので

あればそれに越したことはない、というのが持論だし、たった数日誰かとの会話を楽しんだからといって、その考えが変わるわけではない。

会話、交流、コミュニケーション。そういった種類の、他人との交わりは必要最低限に止めるべきである。レジでの些細なやり取り。荷物受け取りの際に行われる玄関先での会話。そういった、私生活に支障を来さない程度の会話に終始するのが最上だ。

それを踏まえた上で、ではあるが、それでも彼女との会話は楽しい。何気ない会話であっても、彼女と話すことは、非常に充実した時間である。

理由は明白だ。彼女と僕は一定の距離感のまま、決して互いに近づかないからである。

会話やコミュニケーションは、元来互いの距離を詰めるためのものだ。対話を通した価値観の交換、それを通じて親しくなろう、というのがコミュニケーションの正しい使い方である。

だからこそ、僕の人生から排斥すべきものであり、私生活に支障を来さぬように必要最低限に止めているのである。

こちらにその気がなくとも、会話をしようとすれば勝手に向こうがこちらに寄ってくる。その容認しがたい接近が、会話やコミュニケーションに嫌悪感を抱かせるのだ。

しかし、彼女との会話にそんなものはありえない。一番はじめの会話ではこちらも躙り寄るようなこともしたが、それ以上の接近はあるはずがない。互いの素性を知らないのが、その何よりの証拠である。

何度かの会話の後、彼女の名前を聞こうとしたことがある。親しくなる意図はなく、単純に呼びづらいからであったが、彼女の返答は、否だった。

「名前の次は、年齢か。その次は血液型、出身地、母校……。そんな些末な事情は私たちの間には必要ないんじゃないかな？　ただ、この場所で月と水を愛でる。その僅かな間隙に、申し訳程度の会話をする。そんな関係でいいと思うよ。それでも必要だと感じたなら、語りたい方が語りたい時に語ればいい。無理に私事を交換する必要はないさ」

普段と変わらず月を眺めながら、彼女はそう言った。

互いに距離を詰めない。同じ場所にいる以上会話がなければならない、というわけではないが、それでも少しの言葉のやり取りはあっても致し方ない。そこに、互いの情報は必要ないだろう。

この距離感を、僕は気に入っていた。執拗に干渉しない関係は、僕にとっては最上の付き合い方だ。

夜空を見上げると、今日も月が浮かんでいる。今日は弓張月のようだ。

「やあ、今日は少し遅かったね」

歩き慣れない獣道を抜けていつもの場所にやってくると、いつも通り超然と構えた彼女が待っていた。月の光が映えるこの場所では、彼女は一枚の絵画のようだ。

彼女は視線を落としていた文庫本からこちらへ向き直る。

「……本、好きなのか？」

だから、こんな風に他愛もない質問がでてきた。話を膨らませるには少し内容が薄そうだが、メインは月見だ。話は酒の肴以上に不要だろう。

「ああ。昔、随分と時間があった時期があったんだが、その暇に任せて本を読み漁っていた

名残でね。時間を見付けては、こうして活字に耽っているのさ」
相変わらず、さっぱりとした口調の彼女。こうした快活で恬淡なところにも、付き合いやすさがあるのかもしれない。
それはさておいて、果たして月見の場面に文庫本は必要だったのだろうか？
「ん？　別に毎晩が月見というわけではないさ。私が好きなのはここの雰囲気だからね。静かなところで読書というのが好きなんだ。ここは空気も澄んでいるから、感傷に浸るのには丁度良いのさ」
何せ余計なものがないからね、と彼女は微笑みながら文庫本に栞を挟む。
「……読書の邪魔なら退散するけど」
「必要ないよ。どちらにせよ君がきたなら話しながら月でも見ようと思っていたところだ。それにもう何度も読んだ作品だ、今無理に読むものでもない」
すこし拗ねたような空気でも出してしまっただろうか、彼女は諭すような笑顔でそう口にした。年上相応の、達観したような雰囲気である。
語気に現れたいじけた気分が恥ずかしくなり、その場に勢いよく腰を落とすと、夜空を照らす上弦の月を眺める。森の外では相変わらず目を背けたくなるような明るさだが、この場所だけは気にならない。
「どんな本が好きなんだ？」
何気ない質問だ。先程読んでいた文庫本が気になっただけの話である。
「大体何でも読んでいるね。作家で言うなら、夏目漱石が好きだな。知ってるかな、教科書にも載ったりしてるはずだが」
話す彼女は、少し嬉しそうだった。本の趣味に関して語る相手が今までいなかったのだろうか。
「知ってるけど、読んだことはないな。生憎だけど」
残念ながら、それほど読書家でもなければ語れるほどの知識もない。彼女の相手をするには些か以上に力不足だ。
そうか、残念だ、とだけ返すと、彼女は湖に視線を向けた。その姿がなんとも切なく思えてしまった。取り敢えず、家に帰ったら夏目漱石がどんな人物かぐらいは調べておこうと頭の片隅にメモをする。
それかどれぐらい経っただろうか。お互い無言のまま、月を愛でていると、彼女が唐突に口を開いた。
「月は夜空の穴だ、と言っていた人がいてね」
湖に映った月を眺めながら、懐かしむように彼女は言った。その瞳は遠くを眺めるような、自分の心を覗くような、憂い気な色をしていた。
月を眺めるとき、決まって彼女は望郷を思わせる眼差しをしていた。まるで月の世界を懐かしむかぐや姫のようだ、と思ったことがある。その眼差しは、今は悲しげな色に染まっているように見えた。
「暗い天幕に開いた穴から、金色の世界が覗いているんだ、と、まるで子どものようなことを言う人だった。そんな戯言を、真剣に聞いていた私も私だがね」
自嘲気味に笑う彼女。思い出のページをめくるように、淡々としていながら愛着があるような響きが言葉に籠もっている。それが、どうしようもなく不安だった。

「どうした、急に昔話なんて。そういうの話すような間柄だったか？」
これ以上は、親しい間柄が話すことだろう、と無言で責める。これ以上の交わりを、僕は望んではいない。今のこの距離感が、僕にとっては心地が良いのだ。
そうは思いながらも、彼女の過去を聞きたい自分もいる。矛盾したこの感情を、しかし彼女は察したのか否か。
「言っただろう？　語りたい方が語りたいときに語ればいい。今夜の月は、なんとなくそんな気分にさせたのさ」
寂しげに笑う彼女を、僕はそのまま止められないでいた。彼女の話を聞く以上に、彼女の側に踏み込んでしまう気がした。
「大した話じゃないんだ。ただ単に、昔お世話になった先生がそんな話をしていたな、と思い出しただけさ」
そう言いながら、彼女の憂い気な色は晴れる兆しを見せない。笑顔もどこか空虚で作り物じみている。そんな寂しい気持ちを、あの月に見たのだろうか。
雲が風に流されて、月を隠した。月の光が遮られ、湖は少しばかりの暗転を迎える。ぼんやりとした明かりだけでは、この場所はただの広場となる。
そのまま、虚しいばかりの無音が充ちる。語るべきは語り終えたのか、訥々とした昔話を話した彼女は、輝きの失せた湖に、その視線を落とした。そのままにしておけば、沈んで消えてしまいそうだ。
「その……先生とやらには、もう会えないのか？」
沈黙の痛さに耐えかねて、そんな言葉を口にした。
彼女の意識が湖からこちらに引き戻される。黒い瞳は静かで、全てを映して呑み込んでしまいそうなほど深い。
「会いに行こうと思えば会えるだろうが……合わせる顔がないんだ。色々、あってね……」
普段の彼女からは想像しがたいほどに弱気だ。消え入りそうな声も、この森の中にあっては鉄を打つようによく響く。
余程の事情なのだろう。真っ直ぐな彼女だからこそ、悔いていることは尚更に自戒の楔になる。普段の彼女が隠れて消えてしまうほどのことであろう。
自分は、決して彼女の家族でもなければ、良人でも、ましてや友人でもない。ただ同じ場所をこうして好きになった、ただそれだけの関係だ。いや、関係などないと言っても良い。そんな人間が、容易に口を出せる問題ではないのだろう。
そっとして、彼女の答えをそのままにしておけばいい。踏み込みたくないのなら余計にそうするべきだ。親しくなりたい訳でもないなら、そのまま放っておけばいい。
「……でも、会いたいなら会えばいい。会いに行けるなら尚更だ」
それでも。彼女の言葉を、心を、どうしようもなく放っておけなかった。
「合わせる顔がないって、それだけ後悔していることがあるなら、誠心誠意謝ればいい。あんたが好ましく思ってる相手が、昔のことをいつまでもぐずぐずと引きずるようには到底思えない」
こんな風に、自分の気持ちを吐き出したことはなかった。他人に関わらないようにしようと決めてから、自分の気持ちも、言葉も、誰の目も手も届かないずっと奥に押し込めていた。
自分の感情や考えを、乱雑に、粗野に、決してそれを大事だと思わぬように、心の奥底に

しまい込んでいた。そうやって、自分自身の吐露を無くしていた。
しかし、吐き出してしまえばなんてことはなかった。我慢など出来ないまま、決壊したダムのように、思いの丈の言葉が放流する。
「……謝って済まない問題も、あるんだ」
「なら、最初から『また会いたい』なんて思わないはずだ。それに、そんなに悔いていることなら、余計に会わないといけない。会って、謝らなきゃいけないだろ。そうじゃないと、何時まで経ってもあんたは自分を責め続けるだけだ」
許されない程のことを悔いているのなら、二度と会いたくはないはずだ。彼女は自分を責めて、そうして自分自身がその自責の念に埋もれてしまっている。
彼女がそれほどに自分を責める内容を、知っているわけではない。それでも、会いたい気持ちがあるのなら、会うほうがいい筈だ。
それに、悔いているのなら、尚更に謝らなければならない。謝らずに放置して、許されることなどないのだから。責任も過ちも、勝手に消えて無くなるものではない。行動しなければ、決して解決はしないのだ。
「……私は、自分を責めすぎているか？」
許されることが、やはり想像できないらしい。こんなにも自分を責めてきたのだ。それも当然だろう。
「責めすぎかどうかは知らない。けど、その後悔が、あんたの心からの謝罪よりも重いってことはないんじゃないか？」
剥き出しの気持ちは、想像よりも恥ずかしかった。フードを深く被り直して、その日は早めに退散することにした。
「……ありがとう。少しだけ、気持ちが楽になったよ」
去り際、彼女のそんな言葉が、照れた僕の背中に投げられた。
その言葉を噛み締めながら、夜の森を後にする。月は、雲から顔を出していた。

◆◆◆

夜の空に浮かぶ金色の月。幼い頃の僕には、それがとても美しく思えた。

◆◆◆

「やあ、こんばんは」

そんな、いつも通りの挨拶が、先にその場にいた彼女から掛けられた。彼女の手にはパンの袋はない。どうやら食事は終えているようだ。
いつもの調子に戻っている彼女に、特に昨日の件で話しかけるつもりはない。宵越しの話題は、僕たちの間には必要ない。
「今日は少し早い時間からここにいたんだけどね、近くで花火の音が聞こえていたよ。夏ももうすぐ終わりだね」
彼女はそう感慨深く呟きながら、ペットボトルで口を湿らせている。そんな仕草も様になる。
僕は少し離れた場所に腰を下ろすと、静かに湖を眺める。猿猴捉月、とは言うが、水面に映った月を本当に取りたかったのは、他でもない人間ではないだろうか。
彼女とは別の感慨を浮かべながら、ただ静かに水面の月に思いを馳せる。そんな僕に、彼女は再び声を掛けた。
「ところで、夏休みはいつまでなんだい？　夏ももうすぐ終わりだけれど」
らしくもない世間話を切り出したかと思えばそういうことか、と、やや質問に辟易しながら、月から彼女へ視線を向ける。
意地の悪そうな微笑を浮かべる彼女に、僕は少し渋い感情になる。恐らく彼女にとっては『もうすぐ登校日だな、長期休暇の後の学校は憂鬱だろう？』といった意図での質問なのだろうが、こっちはもう少し奥まった事情がある。
それは、僕が最も厭うべき私情の発露だ。彼女に話すべき事ではないし、何より彼女には知られたくない。
そんなことは意にも介さず、彼女は変わらず悪戯じみた笑みでこちらを見ている。
所詮は他人で、親しくなろうと思っている訳ではない。ならば、無視しても良いのだろう。流してしまえば、恐らく彼女も深入りはしない。
だが逆に、親しくなりたくないと思っているのなら、親しくなろうと思う感情を相手から無くしてしまえばいいのではないか。それならば、この話は丁度良いかもしれない。
そんな倒錯した考えが浮かび、僕は彼女の質問に答えた。
「……悪いな。ずっと前から、学校には行ってないんだ」
そう言って、彼女の視線を避けるように、フードを被って視線を逸らした。
そもそも夜にしか出歩かないのは、自分が不登校であることを知られない為だった。誰もが寝静まり、起きているのは昼間の喧噪から外れた人々か、深夜でも変わらず動き続ける人だけ。その中に混ざったとして、自分を爪弾き者だと気付く人は少ない筈だった。
夜の帳は、恥ずかしい自分自身を覆い隠してくれていた。だから、それを暴こうとする月の光も、人の目も、全てが嫌いだった。
彼女も、その例に漏れない。こちらの秘密を暴き出す視線が、痛いほどに突き刺さっていた。だから、僕はその秘密を口にした。彼女の視線に耐えられなかったからではない。単純に、そのほうが距離を保つには丁度良いと思ったからだ。
僅かな沈黙。答えを聞いた彼女は、驚いたようでいて、少なからず予想していたような顔をしている。フード越しでは、彼女の視線の意図を感じ取れない。が、この話をして、好意的な視線を向けてきた人間はいない。
人の社会は、不適合者に対して徹底的に非情だ。共同体である以上、その集団に対して利

益をもたらさない存在、不利益をもたらす存在は排除するべきである。であるならば、その者に対して温情は不必要だ。
排他し、除外し、濱斥する。それこそが世の常であり、人々が自分たちを守る上で必要なことだ。それが例えどんなに些細な問題で、自分自身の人生に欠片ほどの影響もないと知っていたとしても、である。
だから、僕は夜にしか居場所はない。誰もが寝静まる、誰もいない、誰とも関わらない夜の時間だけが、僕の唯一の住み処なのだ。
だから彼女は、僕の人生に紛れ込んだ、ただ単なる偶然だ。夕立に打たれたのと変わらない。突然の天災と何が違おうか。ここで関わりの糸が切れたところで、なんの不具合も起きはしない。

分かっているのに、どうしてこんなにも、後悔しているのだろうか。

「だから、月を美しいと思わないのかい？」
「……え？」
暗い場所から引きずり出されるように、彼女の言葉が耳に入ってきた。
「君が月を眺めるとき、ばつの悪そうな顔をする時がある。見たくないものを見ているような、目を焼きながら眩しいものを見ているような顔だ。痛々しくて放っておけなくなる時もあった」
口も手も出さなかったがね、と付け加える彼女。言われて、月を見上げる。昨日よりも丸みを帯びた月が夜空の真ん中に浮かんでいる。
あの月を、本当に綺麗だと思った頃がある。子どもの頃、縁側から眺めた月は、黒く暗い夜の空の只中にいて、それでも尚輝いていた。子ども心に、その在り方を美しいと感じたことがあった。
いつからだろうか、月が僕を笑っていると思ったのは。
空を眺めるのが好きだった。朝焼けに染まる明けの空も、涼しく爽やかな朝の空も、日の照りつける青空も、夕日に染まる暮れの空も、月と星が輝く夜空も、眺めているだけで心が洗われるようだった。
いつしか時間に追われるようになって、空を見上げるなんてことがまともにできなくなった。上を見上げている暇があれば、何かをしなければならなかった。
手を伸ばしても届かない空。それでも、眺めていれば、その景色を心に焼き付けることができていたのに。いつしか、心さえも遠く離れてしまっていた。
気がつけば、空への憧れは心の中から無くなっていた。子どもの頃は、何をするよりも好きだったことなのに、いつしかそれが生活から切り離されて消えていた。遠く広がるものへの憧憬は、幼い頃だけの特権だったらしい。年月を経る毎に、手の届く範囲のもので満足しなければならなくなった。
遠く広がっていた筈の視野は、いつしか手の届く窮屈な範囲にまで狭まっていた。空と僕は没交渉で、どうしようもなく隔絶してしまっていた。
今の生活になってから、その視野はより狭く、小さくなった。自分の家と、夜の街しか残っていない。まるで絞り滓のような僕の視野を、遠くの月が嘲笑っているのだ。

だから、きっと月を美しいと思わないのは、それが原因。
恨んでいる訳じゃない。妬んでいる訳じゃない。単純に、自分自身の矮小さを見るのが怖いだけだ。僕という存在のちっぽけさが許せないだけだ。月から目をそらすのは、そんな自分自身を嫌う感情を、まざまざと見せつけられるからだ。
月が、輝く。それが、あまりにも美しかったから、目を背けたくなる。
「昨日の話の続きなんだがね」
消え入りそうな僕を掬い上げるように、彼女はそう口にした。意識は埋没していた自己から浮き上がり、再び湖の場所へと戻ってくる。
「……どうして、突然」
「まあ聞きたまえよ。別段関係がないわけでもないんだ」
昨日の話と、今の話に、果たしてどれほどの関係があるというのか。そもそも、こんな自分と、どうして会話をしようとするのか。
彼女の意図を察せないまま、彼女の語りが始まった。
「昨日の話に出てきたことなんだが、先生に合わせる顔がないと言ったのは、実はその方にしてもらったことを無下にしてしまってね。それをずっと悔いていたんだ。せっかくの厚意を、あろうことか無駄なものにしてしまった、とね。
その恩義というのが、まあ私の素行に関係するものなんだが。実は、私も君と同じく学校と縁切りをしようとしていたんだ。所謂不登校というやつだな。籍は置いているが席はない、という状態だったんだ」
彼女は、まるでなんでもないかのようにそう話した。
ずっと、彼女は普通に生活する普通の人間だと思っていた。まさか、同じ穴の狢とは思いもすまい。
「その時に、先生にお世話になってね。本当に、いろんな事に尽力してくれた。私が登校しやすいようにと、配慮をしてくれていたんだ。学校での仕事の範疇外のことまでしてくれていた。どれだけ感謝してもしたりないよ。
なのに、結局私は学校にはいかなかった。そもそも、先生一人が動いたからといって、何かが変わるかと言えば、ほとんど変わらなかった。人一人の力では、どうしようもなかったのさ。分かっていても、その先生は頑張ってくれていたのにな……」
恩を仇で返した、それが彼女の自責の原因だったらしい。どうあっても、彼女はその先生に恩を返したかったのだろう。
「だから、もう会おうと思っていなかった。会って謝りたかったが、そんな資格が自分にあるものなのか、と不安で仕方なかったんだ。先生がまだその学校で働いていると、知ってはいたんだがね。どうしても、会ってはいけない気がしていた。
けれど、昨日の君の言葉が心に突き刺さった。謝って済む問題じゃなかったとしても、謝らなければいけないことを、私はずっと放置していたんだ、と。そのほうが、ずっと罪深いのかも知れないと思った。本当は自分自身で気付くべきだったのだろうが、君に気付かされて、今日、謝りに行ったよ」
「会いに、行ったのか？」
「ああ。謝らなければならないと気付けたからね。そうして謝りに行ってみれば、笑顔で私を免じてくれた。本当に、拍子抜けだった。もっと責め抜いてくれてもよかったのに、それ

だけのことをしたのに、それでも、優しく許してくれた。会いに行ったことを、喜んでさえくれた」

そこに、憂いているような感情はなかった。彼女は、心から穏やかな笑顔を浮かべていた。

「それで、君に気付かされたことがある。自分であれ他人であれ、責めることは簡単だ。思いの丈で糾弾すればそれでいい。でも、許すことはとても難しい。許してもらうために、心からの謝罪をするのも、だ。実際、私は会うだけでも勇気を消費したぐらいだからね。

大切なのは、許すことだ。何よりも、自分自身を許してやるんだ。どんなことであっても、他人の言葉や許しを、受け取れなければ意味がない。どんな言葉であったとしても、それを自分自身の許しにしてやらなければ、効果はこれっぽっちもないんだ。

自分を許してやれるのは、結局のところ自分だけだ。自分を許せる人間だけが、他人を許してやれるんだ。自分に優しくなれ。そうでなければ、真の意味で他人に優しくすることなどできないのだから」

言い終えると、定位置の木の根から立ち上がり、僕の後ろを通り過ぎて森の出口に向かっていく彼女。

「今日は、先に帰らせてもらうよ。それじゃ、縁があればまた会おう」

そう言い残すと、こちらに少しだけ一瞥をくれて、静かに森の奥へと消えていった。

そうして、自分だけがこの場所に取り残された。湖は静かにその水面を揺らして、木々は風に身を任せて葉を擦り合わせている。僕だけが凪いだまま、月の光を浴び続けていた。

「自分を許してやれ、か……」

彼女に不登校の理由は告げていない筈なのに、まるで見透かしたかのような助言だった。ただいくつかの言葉だけで、どうしてそこまで知れてしまったのか。

その場から動けないまま、時間だけが緩やかに過ぎていく。月はその身を傾け始め、空は朝を迎える準備を始めた。もうじき街も朝日の光を浴びて息を吹き返すだろう。

朝と夜の狭間。僕の居場所は朝日に食い散らかされていく。明るくなり始める空を睨んでみても、何も代わりはしない。

月は相も変わらず、空から僕を笑っていた。

◆◆◆

昼の世界に僕はいない。朝日に暴かれて消えてしまう。

夜の世界に僕はいない。月に笑われて逃げ出した。

世界と僕は没交渉。気付けば僕は、自分自身を見失った。

◆◆◆

あれから数日が経った。日付は八月の三十一日。あれ以来、あの場所には近づいていない。どころか、あれほど日課にしていた夜の散歩さえしなくなっていた。彼女に会うのが、どうにも後ろめたかったのだ。

そうしているうちに、始業式の日は刻一刻と近づいていた。今までの自分なら特に気にすることもなかっただろう。いつも通りに夜まで眠りに就き、深夜の散歩をするだけだ。そうやって一日を消費していくのが普通だった。

それが、こんなにも心苦しい。今まで、学校に行かないということが苦しくなかったわけではない。何度も悩んで、一歩を踏み出せないままだった。

「自分を、許せばいいのか……？」

ベッドの上で、天井を睨む。答えは、きっと自分の中にしか生まれない。それに必要なのは、彼女の言葉だ。

だが果たして、どんな顔で会いに行けばいいのだろうか。逃げ出したも同然の自分を、彼女はどのように受け容れるのだろうか。或いは、帰れと一言に伏して追い出されるだろうか。

そんなことを延々と考えているうちに、はたと気付いた。何故自分は、こんなにも他人のことを気にしているのだろうか。

携帯電話を見る。時刻は午前二時三分。出かけるのには少し早いが、構わない。特に規定されているわけではないのだ。自分の気分で決めればいい。

いつもの服装に着替えると、数日ぶりの夜の散歩へと出かけることにした。

獣道を抜ける。くり抜かれたような森の広場、いつもの場所に、彼女はいつもの用に座っていた。

「やあ、久しぶり。もう来ないものかと思ったよ」

挨拶も、数日ぶりだというのに、気が抜けるほどいつも通りだ。会うことを悩んでいた自分が、驚くほど間抜けに思えた。

特に挨拶を返すこともなく、彼女から少し離れた位置に腰を下ろす。フードは被ったまま、湖も、月も見はしない。

「もうすぐ始業式だね。学校には行くのかい？」

質問の仕方も、これまたいつも通り。数日の隔絶が、まるでなかったかのように錯覚してしまいそうになる。

彼女は、別段こちらの対応を気にしてはいないらしい。ならば、こちらもそれ相応に彼女に頼らせてもらうことにした。

「……人一人が頑張ったところで、どうにもならないって言ってたよな」

「ふむ、確かに言ったね。それがどうかしたかい？」

「なら、僕が学校に行ったところで、何があるって訳じゃないし、何を変えられる訳でもない。なら、行く必要なんてないんだ」

「……何か、変えたいことがあるのかな？」

気付かれると思っていた。彼女は、こういうところで妙に鋭いのだ。

「言ってごらん。私も君に背中を押してもらったんだ。今度は私が君の役に立ちたい」
優しい笑みは、いつも通りに。そして、それに言葉を返す僕は、今までとは違って、他人との交わりに、少なからず意味を見出せていた。

◆◆◆

僕の通う高校は、全部で二つのコースと六つのクラスがあり、僕はその中でも進学コースのクラスに属していた。試験の成績と本人の志望進路を鑑みて、学校側がクラスを配分するのだ。
友人たちと一緒に受けた高校で、全員でそろって同じ大学を目指していた。目指す進路が同じであったから、お互いに支え合い協力し合いながら、学生生活を送っていた。
全ては平均の、どこの高校生とも変わらない生活を送っていた。授業を受けて、友達と遊んで、放課後には友達と会話し、課題に辟易し、テストに苦労する。そんな、ごくごく普通の学生生活。突出することもなければ、足りない物もなかった。
全ては順風満帆。順調に学年を進め、皆で同じ大学にいけると、そう信じていた。
だが、学校という社会がそれを許さなかった。
社会には地位が存在する。明確な命令系統、適切な作業分担、そういった効率化を図る上で、上下関係、並列関係は重要な位置を占める。そういった能力や経験に依存する地位が、学校には存在しないし、してはいけない。
学生に学年以外の序列は認めず、生徒は皆平等に扱うのが暗黙の了解となっている。学校とは、生徒という並列関係と、教師という並列関係が、それぞれ上下に重なっているだけであり、それ以外の地位が入り込む余地はあってはならないのだ。
しかし、人が一所に集まれば、そこに自然と上下関係が生まれてしまう。それは人の自尊心であり、征服欲である。
並列関係は親しい友人グループであり、その中だけで交流が完結している。クラスという最小単位の社会の中で、小さな国が乱立しているようなものだ。
クラスでの上下関係は、専ら人気という不確かなステータスによって確立する。そして、その人気を勝ち取るのは、真に誠意ある人間か、声が大きいだけの人間である。運の悪いことに、僕のクラスでリーダーシップを勝ち取ったのは、他でもない後者であった。
こういった手合いの人間に多いのは、善悪の分別が足りないことだ。コミュニティーの隔絶化が、個人の価値観を尚更に狭めてしまうのだ。そして、自分自身と異なる人間に対して、彼らはその在り方や意見への反発を、極端な形でしか表せなくなる。
結果的に起こるのは、いじめだ。スクールカーストと呼ばれる上下関係が、理不尽な暴力を、閉じた社会での共通認識にしてしまうのだ。
そうして、クラスの人間は二分された。虐げる側と、虐げられる側。傍観は許されず、どちらかに属さざるを得ない状況へと追いやられていった。

どちらにも、僕の友人がいた。ついこの間まで仲良く話していたはずの人達が、さも当然のように虐げ、或いは虐げられていた。その現状を、あろうことか教師でさえ解決できずにいたのだ。

僕にも、選択が迫られていた。我が身可愛さに虐げる側に回るのか、精神を磨り減らしてでも虐げられる側の味方でいるのか。かつての友人を殴ることは出来ない。かといって、友人だった筈の人間に殴られることも嫌だった。

そうして悩み抜いて、ふと、自分の中に友人への配慮がなくなっていることに気付いた。

考えているのは、我が身の振り方。そこに友情という感情は無く、孤独の中の選択だけが、頭の中を支配していた。

追い詰められれば、そこに人間関係は介在しない。あるのは自己のみ。であるならば、果たして生きていくことに他者との交流は必要なのだろうか。

そして、僕は逃げ出した。人間関係を恐れるあまり、その無意味さに嫌気がさした。かつて同じ夢を追いかけた友人たちを見捨てたのだ。

空への憧れも、友人との約束も、そうしてなくなっていった。大切だと思っていたはずの物だったのに、手放してしまえば、簡単に心から無くなっていくものなのだと、気付いてしまったのだ。

◆◆◆

語りは終わった。あとは、彼女の言葉を待つだけだった。

沈黙は、果たして誰のための逡巡であったのか。僅かな間をおいて、彼女は静かに口を開いた。

「逃げた、と言ったね。いじめる側に立つのも、いじめられる側に立つのも嫌だったから、そのクラスという社会から遠ざかりたかったんだね」

彼女の視線は、強く固い色に染まっていた。その視線は遠くを眺めながら、心はこちらを見透かすように向いている。

「ああ、逃げたんだ、僕は。人が交われば、争いしか生まれない。ならいっそのこと、その輪から抜け出してしまえばいい」

人には意思があり、思惑がある。それが多くの数で交われば、意思と意思の鬩ぎ合いが始まる。そうなれば、社会というコミュニティーに亀裂が生じるのは避けられない。ならばいっそのこと、そんなもの無くしてしまえばいい。

衝突も諍いも、相手がいなければ成立しない。平和でありたいのであれば、孤独でいることが一番の近道だ。

「では、逃げ出したことを、君は正しいと思っているかい？」

言葉が詰まる。答えが返せない。

「思っていないだろうね。でなければ、こんなに悩むはずもない」

当然のように見透かされてしまう。考えが単純なのは確かだ。
クラスから逃げること、不登校でい続けることを、正しいと思ったことは一度もない。何度も自分を悔いたし、責めもした。それでも、あそこに戻ることだけはしたくなかった。
「……例え逃げることが正解じゃないとしても、僕はあの人間関係の中に戻ることだけは御免だ」
虐げることを当たり前のように行い、虐げられることを諦めて受け容れる。そんなクラスの現状を、僕は心底疎んでいた。そんな渦中に巻き込まれることだけはどうしても避けたかった。
人間は、最低限の交流で生きていける。ならば、高校というコミュニティーは、必ずしも必要ではない。そこに依存することはないのだ。
僕の答えを聞き、彼女は強い眼差しのままこちらに向き直った。黒い宝石のような瞳が、固い意志を持ってこちらを見つめる。
「先達から忠告だ。この世に正解なんてありはしない。あるのは、正しいと思える選択と、間違いだと思える選択だけだ」
「正解が、ない？」
「例え全ての人間が間違いだと糾弾したとしても、その人間が正しいと思ったならば、その選択と行動は正しい。逆に、例え万人に正しいと賞賛されたとしても、その人間が誤りだと断ずるならば、その選択と行動は間違いになる
正しいかどうかを断ずるのは、あくまで行動した本人だけだ。行動の善悪も選択の正否も、判断できるのは、その選択に準拠する価値観を持った当人しかありえない。他ならぬ余人にその判断を下すことはできないよ。六十億の価値観が犇めいているんだ。万人に共通する正解など、この世のどこにもありはしないさ」
判断材料が価値観だけである以上、選択と行動に正否を付けられるのはその選択をした人間だけだという。
正解がない。つまりそれは、全ての人間に共通する選択がないということだ。確かに、それは当然と言えば当然である。
「じゃあ、法律はどうなんだ。あれは万人に共通するものだろ」
「国によって違うし、何よりアレは正解をはじき出す物ではなく、間違いをあぶり出す物だ。正解がないのと間違いがないのは不等号だよ」
間違いはある。では、僕の行動が間違いではないと言えるのだろうか。友人を見捨て、自分の保身だけを考えた選択は、果たして間違いではないのか。
「法に抵触しない以上、それを決めるのは君自身だ。最も、今のような独白をする以上は、間違いだったと思っているのだろうが」
彼女は全てを知っているかのように、諭すように語る。
「人生は、常に選択と行動によって決められる。正しく在り続けることは不可能だ。ならば、その時、その瞬間に正しいと思える行動をしたまえ。後で誤りだと気付くとしても、だ。そうやって、少しずつでも世界を変えていくんだ」
「世界なんて大げさな。クラスのいじめだぞ。個人間やコミュニティーでは大きな問題だけど、世界なんて規模からしたら、本当に些末な問題だ」
「世界という感傷は、常に観測者、つまり君自身の価値観で完結する。世界の中心は常に君

だ。世界を変えることを、君がやらねば誰がやる？」
　彼女の言葉は、すんなりと心に落ちていく。彼女の言葉が、少しずつ、僕の世界を押し広げていくのを感じた。
「私の先生は一人で行動し続けて、何も変えることは出来なかったが、君には、巻き込める人間がいるはずだ。クラスにも、少なからず現状をよく思わない人間はいるだろう。君自身の行動で、彼らの世界も巻き込んでしまえばいい。
　人間は生きているということに多大なエネルギーを使う。生きている以上、他人に影響を与えない人間など存在しないんだよ。君の選択は、必ず誰かの行動に影響を与えることができるはずだ。
　君が台風の目になれ。そうして、周りの人間を引っかき回せばいい。正否の判断など、その後でいくらでもできるのだから。まずは、君が正しいと思える行動から、だ」
「僕が、正しいと思える行動……」
　正しいか間違いかを断ずるのは、結果が出てからでも遅くはない。後悔は先には立たないのだ。まずは、今できることを、精一杯すればいい。
　今までの行動は、間違いだった。それは、自分自身の現状が指し示している。ならば、これから正しいと思える選択に転換していける。その為の気力も勇気も、彼女からもらえたのだから。
　フードを脱いで空を見上げる。満月が、夜空に光り輝いている。もう、僕を笑ってはいなかった。
「月が綺麗だな」
「……どうしたんだい、急に」
　苦笑しながら、彼女は訊ねた。
「さあな。急に、そう思っただけだ」
　穏やかに微笑みながら、僕はそう答えた。

　風が、穏やかに吹いている。僕の悩みを持っていってくれたのかも知れない。今は、驚くほどに心が活力に充ちている。
　月に暈がかかる。温かな光が、湖の広場を優しく照らす。
「……さて、重ねて質問だが、学校にはいくのかい？」
　今更だが、彼女は彼女で偶に空気を読めてない時がある。よく言えばマイペースなのだが、その質問を重ねるのは、なんというか、綺麗な終わり方じゃない。
「……行くよ、行く。変えなきゃいけないことがあるからな」
　今更行っても遅いかも知れない。逃げ出したことを謝って、許してもらえるかも分からない。それでも、これが正しいと思える選択だ。ならば、最後までやり通さなければならない。
　まずは、自分自身が行動する。そうやって、周りさえ巻き込んで、僕の望む正しい在り方に変えていくのだ。
「力強いね。君ならきっと出来るさ」
　優しく微笑みながら、彼女はエールを送ってくれた。
　心は決まった。ならば、あまり長居もしていられない。明日の始業式に支障を来してしまうだろう。今日は、早々に引き上げることにした。

「それじゃあ、そろそろ帰って寝ることにするよ。明日は朝に起きないといけないしな」
「そうか。うむ、君の前途に幸あらんことを」
随分と古くさい言い回しだが、火打ち石を打たれるよりは幾分か穏やかだ。
腰を上げると、森の出口に足を向ける。初めてきたときから数週間、ここにも随分と世話になったものだ。
出口から振り返る。僕の去っていくのを、彼女は真っ直ぐ見つめている。
「あんたは、これからもずっとここに来るのか？」
投げやりな待ち合わせの約束に、彼女は、
「ああ、これからも来るよ」
と、了解の返答をした。
今は歩き慣れた、細い小道に踏み出した。次に会うときには、彼女に名前を聞いてみよう。きっと、答えてくれるだろうから。

夏の終わりに始まった、夜だけの静かな邂逅は、こうしてこれからも続いていく。月が美しく、湖が輝くこの場所で、景色を愛でながらささやかな会話を交わす。それが、僕と彼女の約束だ。
学校に通って、生活のリズムが変わったとしても、この時間のこの場所に、必ず僕はやってくる。
だって、こんなにも、月が綺麗なのだから。

終